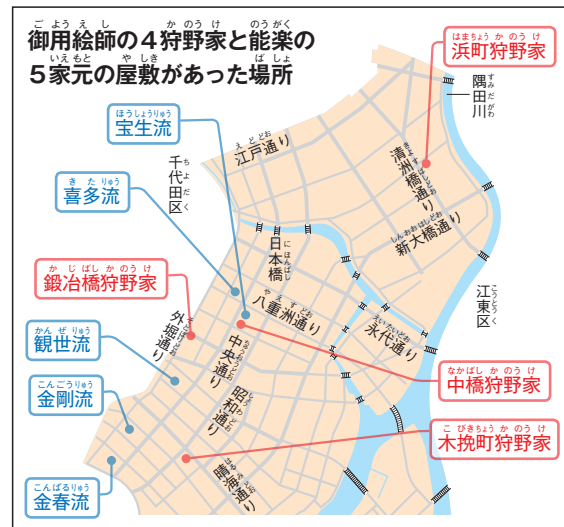


江戸の文化

戦争がなく、人々の生活が安定していた江戸では、上方(関西)で生まれた伝統的な工芸や絵画とは異なる浮世絵などの、江戸独自の豊かな文化が誕生した。

<武士の文化、町人の文化>

江戸幕府を中心とした武士たちは、室町時代に京都の天皇や公家のために生まれた貴族趣味の文化を好み、町人たちは、上方(関西)の伝統に捕らわれない、自分たちの文化をつくりあげた。



「唐子遊園屏風」(部分)
日本画の流派の1つである狩野派の狩野典信(木挽町狩野家)がえがいた作品。「唐」とは当時の中国の国名で、中国を題材とした日本画は唐絵ともいった。

背景には金ぱくを使って
ごうかけらん!
さすがは将軍おかえの絵師。

江戸幕府が大事にした 絵画と芝居

江戸幕府は、中国に影響を受けたごうかな絵画や、謡とおどりを組み合わせた芝居「能」を好んだ。中央区には、将軍家に仕える絵師(御用絵師)だった4つの狩野家と、5つの能の流派の屋敷があった。



木挽町狩野画塾
木挽町狩野家は塾を開いて弟子を育て、弟子たちは明治時代も活躍した。京都の宇治の平等院鳳凰堂に似ている画塾の建物の絵は、ここで学んだ橋本雅邦がえがいた。

宝生流による能舞台
観世流を頂点とする5つの能の流派の1つ、宝生流の舞台。この絵は勸進能の舞台で、勸進とは寺社への寄付を集めること。勸進能は、特別に町人も観ることができた(画面左下の人々)。

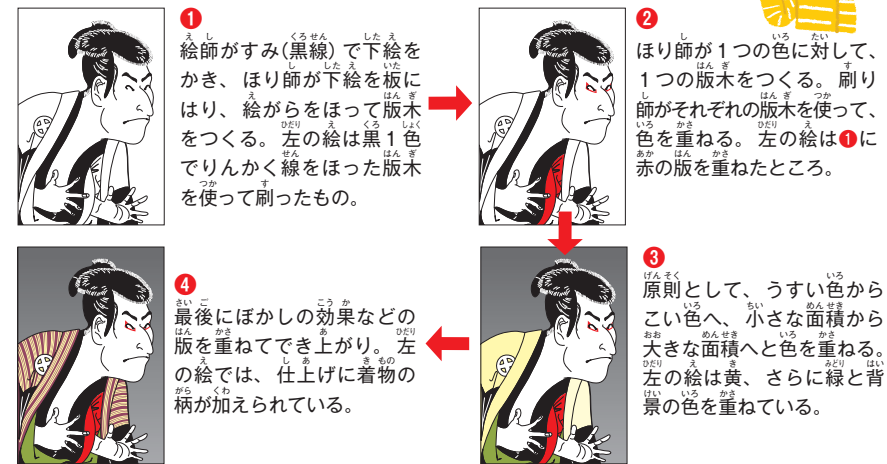
カラフルな錦絵の誕生

江戸時代には、印刷技術が発達した。とくに版画では、すみ(黒)1色ではなく、多くの色を使った多色刷り版画が生まれた。多色刷りの浮世絵のことを「錦絵」といった。

きれいで大量生産
できる版画だから、
人々に広まったんだね。



多色刷り版画ができるまで



鈴木春信の「木馬遊の子と傘差し美人」
楽しそうに木馬に乗った子どもと、母親らしき女性。鈴木春信(1725~1770)は、錦絵の成立に中心的役割を果たした浮世絵師。美人画が得意だった。

絵本から小説まで

多くの本が出版された

宝暦年間(1751~1764)から天明年間(1781~1789)になると、上方中心だった出版活動が、江戸でさかんになる。草双紙といわれる絵入りの本や、文章が中心の読本が出版され、有名な作家も生まれた。



話の内容で色分けされた
赤本、青本、黄表紙
赤本(左)は子ども向けの絵本で、青本(中)は子どもや女性向けに、歌舞伎などの話がわかりやすく書かれたもの。黄表紙(右)は、しゃれや皮肉が混じるおとな向けの絵本で、山東京伝(-p.64)は、その代表的な作家。



十返舎一九の『東海道中膝栗毛』
弥次郎兵衛(やじさん)と喜多八(きたさん)が、江戸から伊勢参りに向かう旅のようすがおもしろおかしく書かれている。旅行ブームだったので、旅のガイドブックもかかっていた。

ヨーロッパの画家たちがまねをした 浮世絵画家

歌川広重(1797~1858)
八重洲河岸の火消の家に生まれた歌川広重は、風景画が得意だった。19世紀後半のヨーロッパの画家たちは、広重の作品をかき写した。

「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」
晩年のけっさく。オランダの画家フィンセント・ファン・ゴッホがかき写し、「日本趣味 雨の大橋」とタイトルをつけたことでも知られる。

江戸に出版文化を広めた

「版元」と「貸本屋」

江戸には、作家に物語を書かせて本にして売る、版元が多くできた。また、貸本屋という、本を安く貸す商売も生まれ、読書の習慣が人々に広まった。



版元から本を仕入れる貸本屋
貸本屋は、版元から本を仕入れると、本を風呂敷に包んで家々を回った。絵の左側で風呂敷包みを背負っているのが貸本屋。

中央区のおもな版元と出版物

版元	おもな作家と出版物
つたや 蔭重三郎	さんとうきょうでん さくひん 山東京伝の作品
須原屋市兵衛	すげんげんべい 杉田玄白「解体新書」
つるや 喜右衛門	じゅうていいたねひこ にせらぎらいなかげんじ 柳亭種彦「信玄 田舎源氏」
村田屋治郎兵衛	じゅうべんしやいっく どうかいどうきょうひやくりげ 十返舎一九「東海道中膝栗毛」
丁子屋平兵衛	きょくていばきん なんそうきとみほつけんてん 曲亭馬琴「南総里見八犬伝」

宅配のレンタル CD屋さん みただね。



蔭重三郎の店
日本橋の通油町(現・日本橋大伝馬町三丁目)にあった。江戸時代の代表的な版元で山東京伝や浮世絵師の喜多川歌麿、写楽たちを育てた。